
垂れ耳彼女と金髪勇者

辻虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

垂れ耳彼女と金髪勇者

【Nコード】

N0500U

【作者名】

辻虎

【あらすじ】

DOG DAYS第11話のエクレール（のデレ）を見た作者（p主）の想像力（妄想力）で書いた平行世界のもう一つの物語。エクレールです。

01 平行世界の日常（前書き）

初注意

この作品はエクレーヴです。

01 平行世界の日常

ビスコッティ共和国、ビスコッティ城城内の訓練所。
金髪の少年と垂れ耳の少女が戦っていた。

「てい、やああ！」

「やるな勇者、だが……まだまだああ！」

そう言って神剣『バラディオオン』が弾き飛ばされ勇者と呼ばれる少年は腰を抜かす。

「はあはあ強いねエクレは」

彼の名はシンク・イズミ。地球からこのビスコッティ共和国に召喚された勇者だ。

「ふん、お前が弱いんだ」

シンクはエクレと呼ぶ少女はエクレール・マルティノッジ。ビスコッティ軍の親衛隊長を任されている。

「でも、まあ腕を上げたな」

そう言ってエクレールは手を差し出す。

その手を借りてシンクも立ち上がる。

「おお、やってるな」

そう言って歳が五く六歳離れた垂れ耳男性がやってくる。

「兄上」

ロラン・マルティノッジ。エクレールの兄であり騎士団長である。

「仲が良いな、最初の方は犬猿の仲だったのに」

そうだシンクが勇者として召喚された際はどちらもお互いを認め合っては無かった。

だがそれは一カ月ほど前の話だ。

「今は親衛隊副隊長ですから」

今はビスコッティの領主のミルヒオーレ・F・ビスコッティに認められ副隊長の称号を与えられたのだ。

「まあ、今でもお荷物だな」

エクレールに痛い所を突かれて何も言えなくなってしまう。

それもその筈だ、一人での行動の方がやり易い面もある、それにまだ見習い勇者のシンクでは部隊の動かし方など解らない。

その為良い成果を上げてはいないのだ。

「まあ、今は技を鍛えながらも成長するのが良い、一遍に色々覚えるより時間を掛けて覚えたほうが良いと思うよ」

「はい、ありがとうございます！」

そう言ってロランは何処かへ行ってしまった。

「さあ、勇者。訓練を再開するぞ」

「うん！」

そう言って2人は武器を持つ。

01 平行世界の日常（後書き）

感想よろしくお願いします。

02 親衛隊長の憂鬱

エクレールは大浴場に一人で入って星空を見上げていた。

「はあゝ」

大きなため息を吐く。

「シンク……………」

これまで勇者と言ってきたのでいざ言うとなると恥ずかしい。

「先客でござるか？」

「おや、エクレ如何したのでありますか？」

「ああ、リコとユキカゼか」

一人は茶髪の小柄な少女リコッタ・エルマール、国立研究院の首席研究士、簡単に言えば学者や発明家とも言える。

もう一人はユキカゼ・パネトーネ、金髪でスタイルが良い。

他の2人とはそう歳は離れてはいないのになぜこんなにも個性差が……………」

「おい、ナレーター、それ以上言ったら八つ裂きにするぞ」

「リコッタも本気を出しちゃうでありますよ」

怖い眼をした2人が何処かを睥む。

「2人とも誰と話しているでござるか？」

「こっちの話でありますよ、それより如何したでありますかエクレー？」

「いや、別に……………」

「シンクの事でござるよ」

「なっ、誰もあんな奴の事なんか！」

「顔が赤いでありますよ」

2人はニヤニヤと笑いエクレールを追い詰める。

「のぼせただけだ」

そう言って浴場を出ようとするエクレールの手を2人は掴む。

「ダメでござるよ、ちゃんと十万数えないと風邪をひくでござるよ」

「そんなに入ってたら本当にのぼせてしまうぞ！」

「まだのぼせてないのなら大丈夫でありますよ」

墓穴を掘ったと思い諦めて湯船に浸かる。

「如何したでござるか？」

「別に大した事じゃない」

「大した事じゃないのなら言えるでありますよね？」

エクレーは諦めた、今のこの2人から逃げる事は出来ない。

「勇者の事なんだが実は呼び方を変えたいと思っているんだ」

「やっぱりシンクの事であったか」

「まあ勇者召喚されて一カ月経ちシンクも立派な騎士でありますから」

「でも今変えるのは気恥ずかしいという事でござるな」

エクレーは小さく頷く。

「大丈夫でござるよ、さりげなく言えば大丈夫でござるよ」

エクレーは鼻まで潜る。

「まあそれで仲も進展すれば良いのでありますが」

「な、これ以上仲良くなって何になる！」

「えっ、エクレーはシンクの事好きじゃないのでありますか？」

「なっ!？」

「拙者のデータではもう相思相愛率は70%を超えたはず………まだ素直にならないでござるか？」

エクレーは顔を茹でダコのように真っ赤する。

「以外に慎重でありますなあ」

2人はまたニヤニヤと笑いだす。

「私はもう出る!!」

そう言って一人で出て行ってしまった。

「ちょっとやり過ぎたでありますか」

「いや、エクレーにはこれくらい言わないと動かないでござるからな」
(頑張るでござるよエクレー)

02 一親衛隊長の憂鬱（後書き）

感想よろしくです。

あとこの作品の次は誰にしようか考えているのですが中々まとまりません。

ミルヒオーレ・リコッタたん・ユキカゼ・レオンミシエリ閣下様・ジェノワーズ（3人）のどの√か悩んでいます。

お便り募集中です。

活動報告の所に書き込んでいただければ幸いです。

03 一勇者の憂鬱

シンクはベツトに入り天井を見上げていた。

「はぁ、エクレは如何したら認めてくれるのかなぁ」

彼女は彼女でシンクを思い、シンクは彼女の事を思っていた、

「いい加減に認めて貰いたいけど……………」

そうにもいかない。

未だに足を引っ張っている自分を認めてくれる人なんて姫様しかない。

そう心に思いつつも本心では一人前と言われたい。

彼女の背中を守る、そんな男になりたい。

元の世界に帰らずにこの世界に残ったのはエクレールの所為である。

「告白したらどうなっちゃうのかな、僕たちの関係」

シンクはエクレールに惚れている。

だが人生経験も少ないし恋愛経験はゼロに近い（と言うかゼロ）。

「如何したら上手く告白できるかな？」

友人であったレベツカに聞けばとても簡単だった。

でも今は彼女は隣には居ない。

「まぁ、時間は有るし十分に考えていこう」

シンクは目を閉じて寝る事にした。

「おやおや、どちらとも相思相愛で嬉しいでござるな」

「少し妬いてしまうでありますな」

部屋の外でドアにコップを当てている2人はリコッタとユキカゼであった。

「おい、そこで何してるんだ？」

「「ッ！」」

彼女らの後ろにはエクレールが立っていた。

「ユキカゼは別に何でも無いでござるよ！」

「拙者は別に怪しい事なんてしてないであります」

「2人ともセリフが混ざっているぞ」

2人とも慌てて盗聴道具もといコップを隠す。

「エクレールこそ勇者様に大事な話でござるよな」

「べ、別に大事と言うほどではないが」

「そ、それでは自分達は帰るであります」

2人はドアの前を退いて一目散に退散する。

「何だアイツら？」

エクレールはドアの前に立ち大きく深呼吸をする。

「よし」

そしてドアノブを捻るのであった。

03 一勇者の憂鬱（後書き）

感想よろしくです。

04 垂れ耳の決意

ドアを開けるとベットに入り天井を見上げるシンクがいた。

「勇者、相談があるんだが」

「如何したのエクレ？」

ベットから出て部屋の明りを着ける。

「いや、大した相談じゃないんだが……………」

「な、何かな？」

気まずい空気が2人の周りを包み込む。

お互いに相手が好きでなのから意識してしまい沈黙が続く。

「実はこ、今度の休みに新しい剣を買いだいがもし良かったらで良いから付き合ってくれないか？」

「買い物？別に構わないよ」

「そうか、なら良かった」

エクレールは尻尾を左右に振りとても喜んでいた。

その頃シンクの部屋の前。

「ダメでありますよ、もう少し可愛い買い物じゃないと！」

「初デートに武器の購入はないでござるよ」

「エクレールもついにそんな年頃ですか……………」

リコッタとユキカゼと共に何故かミルヒオーレ・ビスコッティまでもがドアにコップを当てて盗聴をしていた。

その瞬間ドアがガチャリと開き満面の笑みのエクレールが出てくる。

「「「「あ……………」」」」」

盗聴をしていた三人と盗聴されていた2人が顔をあわす。

エクレールの表情がどんどん変化していき最終的には顔を赤面させた。

「リコ、ユキカゼ、それに姫様まで」

「エクレ、これは偶然と言うか何と言うか」

「アレでござるよ、子を思う親の心境で……姫様も何か……って居ない！」

ミルヒオーレは一足早く撤退していた。

「流石は姫様、では拙者も……」

「リコッタも撤退でありま……」

ガシツと2人の肩を強く掴まれる。

「2人とも話がある」

エクレールは微笑んでいるが目元に涙が溜まっている。

「ちょ、助けて勇者様ああああ！」

「助けてでござるうううう！」

そのままズルズルと引きずられ2人は部屋を後にした。
その夜には謎の悲鳴と断末魔が絶えなかったと聞く。

04 一垂れ耳の決意（後書き）

感想よろしくです。

05 垂れ耳の初デート

現在は朝の10時である。

ビスコッティの町は活気に満ちている。

「エクレは如何したんだろう？」

時間には精確なエクレールより先にシンクが待ち合わせ場所にいた。

「お、遅くなった。勇者」

エクレはまるでロボットの様なぎこちない動きをしていた。

「大丈夫？」

「も、問題ない」

そう言って2人は歩き始めた。

その後ろに何処かで見た人影があった。

「行くでありますよ、ユッキー」

「ハイでござる」

何時ものメンツであった。

（うう、緊張で眠れなかったとか私は子供か！）

彼女が遅れた真相も知らずシンクは真剣に武器選びをしている。

「ねえ、エクレこれは如何かな？」

そう言って手渡された双剣を持つ。

「もう少し刀身が長い方が良いな」

普通のデートのショッピングとは全く思えない。

（それにあの2人はまた居るのか！）

前回でお灸を据えたのにまだ反省していない。

「エクレ、これはどうかな？」

そう言って持ってきたのはさっきのよりも少し長めの剣だった。

「これは……………」

重さも長さも良く、手に馴染みやすい。

「でも私の手持ちじゃあ……」

予算より少しほどオーバーしているために諦めるしかなかった。

「それじゃあ、僕に奢らせてよ」

「いや、そう言う訳には……」

「何時も脚を引っ張ってるお詫びだよ」

そう言ってシンクは双剣を無理に購入してしまう。

「押してるでありますな」

「エクレは攻めに弱かったでござるか」

2人は尾行を気付かれている事など知らずにニヤニヤと笑っていた。

「それにしても勇者殿もやりますなあ」

「リコッタがこれほどか弱い女の子に見えたのは初めてであります」

2人はニヤニヤと笑いながら尾行を続ける。

武器屋を出た後はゆっくりと街を歩いた。

「ゆ、勇者」

「如何したのエクレ？」

「あの、礼を言う」

「剣の事なら別に良いよ」

「それじゃあ、私の気が収まらない！」

エクレールには何時もの気迫が無かった。

「お詫びだし、別に良いよ」

「せめて、これだけでも受け取ってくれ……」

そう言ってエクレールは紙袋を渡す。

「これは？」

「さっき店で見かけたんだ、安物だが」

袋を開けると緑色の綺麗なペンダントが入っていた。

「気に入ってもらえれば嬉しい」

「エクレ、ありがとう、大事にさせてもらうよ」
エクレは明るい表情に戻り尻尾を左右に振る。

05 一垂れ耳の初デート（後書き）

感想よろしくです

06 一垂れ耳のデレをご覧ください

エクレはシンクに買って貰った剣を机に飾り見つめていた。

(勇者からのプレゼント……………)

そう思うと嬉しくて仕方がなかった。

デートの際に勇者に渡したペンダントも好評だったし、そろそろ告白しても……………

「はっ！私は何を考えていた！私は別にあんな奴なんか……………」
だがシンクの事は頭から離れなかった。

「別に、あんな奴なんか」

「本当は好きなんですけどね」

「エクレは素直じゃないでありますなあ」

「な、お前ら何時の間に」

いつものリコッタとユキカゼのエクレール弄りが始まった。

「自分に素直になるのが一番でありますよ」

「そうでござるよ」

そう言ってエクレールの肩にポンと手を置く。

「そう言えばあの時もストーンキングしてくれたな」

ビクウと2人の肩が震えて2人とも異常な量の汗を出している。

「エクレ、アレは娘思いな父親と言うか……………」

「拙者は別に自分たちが楽しもうなんて考えてないでありますよ」

「リコ、言い訳は見苦しいぞ、ユキカゼはセリフが混ざってる」

エクレールは2人の服を掴みそのままズルズルと引きずって行く。

「「いやあああああ！」」

2人の断末魔はビスコッティの名物になるだろうとシンクはペンダントを見ながらそう思った。

06 一垂れ耳のデレをご覧ください（後書き）

短くてすみません。

あと次回の投稿は来週の月曜になってしまいました。
すみません。

07 一戦興業

今日の正午にガレット獅子団領から宣戦布告を受けた。
今回はビスコッティの砦の前で行われる。

「明日の昼か……」

戦は明日の昼に行われる。

もちろん、親衛隊副隊長であるシンクにも関係はある。
作戦や部隊の配置は勿論、他の部隊との連携、兵の体調管理、全
てが回ってくる。

それを纏める為の本や資料が机の上に散乱している。

「はぁ、忙しいなぁ」

それも仕方がない事なのだ。この世界で生きる事はこの世界のル
ールと共に動くと言う事になる。

「エクレは如何してるだろう……」

こんなときでもエクレールが気になってしまう。

「まぁ、時間はたっぷりあるし大丈夫かな」

と言っても未だにフロニヤルドの字は理解できないのが現状だ。
トントンと誰かがドアを叩く。

「勇者、私だ。今時間はあるか？」

「エクレ？ 良いよ入って入って」

エクレールは入ってくると机の資料に真っ先に見る。

「何だ、まだ終わって無かったのか」

「あ、あはは」

「笑って誤魔化すな」

シンクはションボリと落ち込んでしまう。

「まだ字が読めないのか？」

「恥ずかしながら……」

エクレールはペンを取ると椅子に座る。

「私も手伝ってやるからさっさと終わらせるぞ」

そう言って2人は一緒に机に溜まっている資料を片付け始めた。

07 一戦興業（後書き）

感想よろしくお願いします。

08 一戦の前日

月は真上に出ていた。

仕事が一段落ついたので2人で息抜きの為に外へ出ていた。

「月が綺麗だね」

「ああ、そうだな」

エクレールは何か考え込んだ表情を見せていた。

「エクレ、どうしたの？ なにか悩みごと？」

「何故、そんな事がわかる？」

エクレールは何か驚いたような口調で返す。

「解るよずっとエクレ見てきたんだから」

「なっ！」

エクレールは顔を紅潮させて黙り込む。

「エクレ、顔赤いよ、風邪？」

そう言ってエクレールの額にシンク自身の額を当てる。

「ふえ！？」

奇声を上げたエクレールの顔は真っ赤になり頭から煙が出ている。

そしてそのまま崩れ落ちて行った。

「エクレ！？」

シンクは倒れたエクレールを起こす。

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

エクレールは少し顔を赤くさせたまま立ち上がる。

「なあ、勇者」

「何？ エクレ」

「何で残ったんだ？」

いきなりの質問に対してシンクは冷静に答えた。

「何でだろうね、帰る途中に何か戻っちゃいけない様な気がしたんだ」

シンクの発言にエクレールは眼を丸くする。

至ってシンプルな解答にエクレールは少し疑問を抱いた。

「それだけの理由か？」

エクレールにはそれだけの理由で元の世界に帰らなかったとは考えようがなかった。

だが……

「それだけだよ」

シンクはYESと答えた。

「まあ、ちょっとだけエクレが心配だったかも」

「何だそれは」

エクレールは笑みを溢す。

「勇者」

「何？」

「明日の戦が終わったらお前に言いたい事がある」

そう告げてエクレールは自室へと戻った。

08 一戦の前日（後書き）

「ついに来たぜ告白フラグ！」
感想よろしくお願いします。

09 一戦いの幕開け

待ちに待った戦当日。

現時刻は丁度10時を過ぎた所だ。

エクレールは一足早く昼食を取り武器の手入れをしていた。

「お前の初仕事だな」

武器は前回のデートで買って貰った剣だ。

「……………」

だが本心ではエクレールは使いたくは無いのだ。

シンクに買って貰った初めてのプレゼントを大切にしたい。

だが使わないのは買ってくれたシンクに対して失礼だ。

そんな心がエクレールの心を左右へ動かす。

「まあ、武器は武器だ、壊れても別に悲しくなんか……………」

だが実際に壊れてしまうと切なくなってしまう。

「悲しくなんか……………」

どんどんこの武器が使いずらくなってきた。

「エクレ、お待たせ」

「な、ゆ、勇者!？」

エクレールは慌てて武器を収める。

「今回も頑張ろうね」

無邪気に笑うシンクには複雑な乙女心など理解しがたいものだった。

（人の気も知らないで）

戦開始の数分前になり自分の持ち場に着く。

エクレールは砦の後ろで侵入してきた兵を薙ぎ払い、シンクは砦の前で戦う。

「勇者、勝ちに行くぞ」

「任せて、エクレ」

09 一戦いの幕開け（後書き）

すいません小説のデータが飛んでしまったので
次回は未定となってしまいました。

本当にすいませんでした。

一週間以内には書き直しますので……………

マジですいませんでした。

10ーガレット獅子団

「はああああああ！」

「うおおおおお！」

敵軍の兵を次々と薙ぎ払う2人は壁越しでも息が合っていた。

「切りが無いね」

「それも戦の醍醐味だ」

次々と来る敵に対してシンクは武器の形を変える。

棒、剣、盾、最近では弓にまで形状を変える事が出来る。

ビスコッティの聖剣パラディオンは使用者の意志で形が変わる。

「紋章砲！」

パラディオンをブーメランの形に変形させる。

「行っけええええ」

投げたブーメランは風を纏い敵に向かって飛んで行く。

風は小さな竜巻となり敵を次々に吹き飛ばしていく。

「良し！」

帰ってきたブーメランを掴み形状を弓へと変える。

弓矢を地面に向かって放つ。

矢の刺さった地面は赤く色を変えて…………

「喰らえ！」

爆発した。

シンクの舞台は砦の上で眼をパチクリさせていた。

「弓兵、撃てええ」

シンクの合図に砦の上の兵は我に返る。

無数の矢が放たれ、敵の半数が獣玉へと変わる。

「おい勇者、私の楽しみが減るだろうが」

エクレールが砦の上でつまらなさそうに見ていた。

あっちも片付いたみたいだ。

「ゴメンゴメン、でもさっさと倒してエクレの話も聞きたいから」

「なっ、バカ！それは言うなっ」

「お主らは仲がいいのお」

黒いセルクルに乗った白銀の髪の女性は大斧を片手にこっちを見ていた。

「レオンミシエリ姫！」

レオンミシエリ・ガネット・デ・ロワ、ガレット獅子団の領主でもあるミルヒオーレの幼馴染でもある。

「閣下と呼ばんか垂れ耳！」

10ーガレット獅子団（後書き）

感想よろしくお願いします。

次回は三日後です。

11ーガレット獅子団長

閣下はセルクルから降りて大斧を担ぐ。

「無粋な邪魔者はおらん。今なら思う存分に戦える」

砦の兵たちを避難させてシンクが前線へと立つ。

パラディオンの形状を双剣にして構える。

「垂れ耳も来い、そっちの方が盛り上がる」

「ですが……………」

「大丈夫じゃ、お前等2人など軽く捻ってやるわ」

その言葉にカチンと来たエクレールはシンクの隣へ立つ。

「勇者、息を合わせろ」

「解ってるって」

2人は正面から突っ込んだ。

正面の2人に対して大斧を振りかざす。

閣下の手前で二手に分かれる。

シンクはパラディオンの形状を大剣へと変化させる。

「ていやあああ！」

大剣を思いっきり振りかざしたが斧で防がれてしまう。

「今だ！」

「何!？」

エクレが閣下の懐に入っていた。

「はああっ！」

剣先は服を掠めただけだった。

「くそっ！」

2人は一旦距離を置く。

シンクはパラディオンを棒へ変える。

「はああ！」

そのまま閣下に突進する。

「一人では勝てんぞ」

閣下は斧を弓へと変える。

閣下の持っている武器も聖剣なのだ。

「喰らえ」

弓矢が放たれたがシンクを掠めただけだ。

「エクレ！」

標的はエクレールだった。

矢はそのまま一直線にエクレールにへと飛ぶ。
だがしかし。

「ふん！」

双剣で弓を一刀両断した。

『あの頃の私とは違う』そう瞳が答えていた。

11ーガレット獅子団長 (後書き)

感想よろしくお願いします。

それと活動報告に大切な事が書いてますので読んでください。

12 決着の果てに

「はあああっ！」

「ていやああ！」

息を合わせて攻撃を続ける。

「はああ、中々やるのう、お主ら」

「当然ですよ」

エクレールとシンクは背中を合わせてこう言った。

「親衛隊隊長ですの」

「親衛隊副隊長ですから」

レオンミシエリは武器を強く握る。

「ならこっちも答えてやらんとな」

三人は自分達の敵を目指して武器を構えて走りだした。

「「「ていやああああ！」」」

3人の攻撃が終わる。

「「「……………」」」

静寂が3人を包み込む。

「ふっ」

レオンミシエリが笑うとシンクのパラディオンが砕けた。

「残念じゃがこの勝負……………」

「「勝った」」

エクレールとシンクはそう言うのとミオンミシエリの服がボロボロに破け去った。

「……………負けたのか」

ミオンミシエリは今何が起こったか分からない顔をしていた。

「残念ですか閣下」

「今回は私達の」

「「完全勝利です」」

戦は大將撃破によりビスコッティが勝利を収めた。

「しかし、あの時はダメかと思ったよ、エクレのおかげだね」

「私が活躍したわけじゃない、私達2人の活躍だ。喜んでおけ」

2人はベンチに座りジュースを飲んでいた。

「おやエクレにシンクではござらんか」

「奇遇でありますね」

そこにユキカゼとリコッタがやってくる。

（今の今までそこで監視していた奴が何を言ってるのやら）

「2人とも大活躍でござったな」

「格好良かったであります」

「でも最後のは悪役だったでござるな」

「アレはエクレがした事だから」

そう最後のインタビュの時にレオンミシエリ閣下様の服が完全に下着諸共破け去った。

パンツだけは残ったがレオンミシエリは顔を真っ赤にして「くっ！覚えておれ、この借りは何時か返す」と言って帰って行った。

「前回の借りを返したただけだ」

前回はエクレがその立場だったのだ。

「それと勇者、話がある」

「ん？」

そう言ってエクレールはシンクを人気のない場所に連れて行った。

「遂に来たでござるよ」

「はいでありますユッキー」

その後ろをリコッタとユキカゼが着いて行こうとするが

「2人とも少し落ち着け」

そう言って誰かが2人の首元にチョップを入れて気絶させる。

「悪いな2人とも妹の告白の邪魔になってしまうから」

2人はメイド達に運ばれていった。

「勇者、その話なんだが」

人気がない森の中、告白するなら今である。

「じ、実は」

「何？」

「こ、今度からシンクと呼んでもいいか！」

「良いよ、別に」

エクレールは頭を抱えて座り込む。

（落ち着け、落ち着け私！）

「ねえ、エクレ」

「は、はい！」

いきなりの呼びかけに驚いたエクレールは声が裏返った。

「僕からも話があるんだけど良いかな？」

「か、構わないぞ。勇者」

「シンク、そう言ってよ」

「シ、シンク」

シンクは息を大きく吸って吐いた。

「今回の戦は大成功だったと思うんだ」

「そ、そうだな」

「息もぴったり合ってた」

「ああ」

顔を赤く染めているエクレールにシンクは今回の戦績を話す。

「今度から……………いや今日からエクレの背中をずっと守って行きたいんだ。だから何時までも一緒に居てくれるかな？」

「ふえ！」

今の言葉にエクレールの頭が理解できていない。

何時までも一緒に居たい。その言葉の解読にエクレは顔を真っ赤にする。

「それって、つまり」

シンクは一度頷きエクレールの手を両手で握り言った。

「好きです、付き合ってください」

「あ……………ああ」

エクレールは瞳から雫を流す。

悲しいわけではない。シンク自らが告白してくれた事、相思相愛だった事、そして自分の恋が成就した事が嬉しかったのだ。その嬉しさが瞳から溢れ出た。

「答えは待つよ、何時までも」

そう言ってシンクはエクレールの手を離し後ろへ下がる。

「待て！」

そう答えるので精一杯だった。

目を拭いエクレールはシンクの手を取る。

「私は今までお前の事をバカにしてきた、こんな私の何処が良いんだ？」

何故こんな事を聞いてしまったんだろう。答えを返せばそれで良かったのにとエクレは悔やむ。

「何時も真っ直ぐで強いし僕なんかより頼りがいがあるし、それにとっても魅力的だったから」

答えたシンクは少し照れくさくなって頭を掻いた。

エクレールはまた瞳に雫を貯める。

幸せと嬉しさが瞳から零れ落ちた。

「わ、私で……………良かったら」

泣き崩れたエクレールを強く抱きしめる。

戦勝利の花火が2人の事を祝福した。

12 決着の果てに（後書き）

ついにエクレー✓に入りました。

次回からはイチヤつく二人をご覧ください。
戦興業も忘れずやります。

13 彼女いない歴0年、彼女いる歴1日目

祭が終わり朝が来た。

「よ、良し」

エクレールはドアの前で決意を固める。

決意を固めるまで三十分ほどかかったがついに覚悟が出来た。

ドアをコンコンと叩く。

「シンク、起きてるか？」

シンクはベットにぐっすりと眠っていた。

エクレールはそっと近づきシンクの横に立つ。

「起きろシンク、朝だぞ」

だが起きる気配は無い。

「よし、こうなったら」

シンクの鼻を指で摘む。

そしてエクレールはそっとシンクに顔を持っていく。

「……………」

お互いの息がお互いの頬を撫でる。

そしてゆっくりと唇を突き出して……………

「やっぱり私には出来ない！」

そこで顔との距離を離してしまう。

シンクの口には変わりにエクレールの手が置かれる。

「キスなんて、まだお互いに許可など取ってないし寝込みを襲うなど騎士として如何なのだろうか！」

眠っているシンクの部屋で大きく声をあげるエクレール。

周りから見たら『さっさとキスしちまいなよ』と言いたくなってくる。

「何か言ったかなレーター」

エクレールは向こうを向いてそう呟いた。

エクレールの手を何かが叩く。

「……………？シンク！」

振り返ると真っ青な顔でシンクが救難信号を出していた。
エクレールの両手はシンクの鼻と口と言う呼吸器官を塞いでいたのだ。

「朝から酷い眼にあったよ」

「それは、シンクがぐっすり寝てるから……………悪かった」

「気にしないでかわいい彼女が起こしに来てくれたんだし」
ゴスッとシンクの腹部に拳がめり込む。

「さらっと恥ずかしい事を言うなバカ勇者！」
照れ隠しである。

そして半分怒っている。

シンクから勇者へ戻ると言う事は大抵は怒っているのだ。

「ぬぬぬっ、良い雰囲気と言う事は」

「昨日、自分達が寝ている間に何かがあったでありますね」

シンクの部屋の窓に張り付いて二人の会話を盗み聞いている。
ドアから聞くのはバレやすい、部屋と部屋の壁は防音性が高い。

「ユッキー、手が、手が痺れてきましたであります」

「が、我慢でござる」

「今日は非番だから出掛けに行こうと思ったんだが」

「構わないよ、何処行く？」

「良い所を知っている、支度をしたら行こう」

「それじゃあ、後でね」

エクレールはそう言って部屋を出た。

「デートでござるか、リコ急ぐでありますよ」

「ハイであります」

その時、窓が開いてシンクが顔を出す。

13 彼女いない歴0年、彼女いる歴1日目（後書き）

感想よろしくお願いします。

14- ガウル直属親衛隊

ユキカゼとリコッタを吹き飛ばした後、二人は街中を歩いていた。「まったくあの2人ときたら」
まあまあとシンクがエクレールを宥めながらも二人は人ごみに紛れていく。

「だがしかし」

「諦めないでありますよ」

ユキカゼとリコッタが遠くで望遠鏡から二人を覗いていた。

「今回は盗聴器と発信機を付けているであります」

「抜かりは無いでござる」

そう言って二人はリーダーを取りだし片方の耳にイヤホンを着ける。
る。

『そう言えばエクレ、何処行くの?』

『良いから着いて来い』

「さっそく動きがあったでありますよ」

「そっちは任せたでござる」

ユキカゼが通信している相手はシンクとエクレールを追っていた。

「エオンミシエリ様から特命を受け」

「我らビスコッティの地に立つ」

「ガウルの直属親衛隊」

「「ジェノワーズ!」」

と小声で言い後を着けるのはノワール、ジョーヌ、ベールの通称
三バカトリオである。

「誰がバカや! 誰が」

「そんな事よりも」

「追いかけるのが優先……………」

ノワールが先頭に立って後を追いかける。

「と言ってもレオンミシエリ様の命も今回はちょっと強い引けたけど」

「悪くはありませんね」

「どっちかと言うと面白い」

ジョーヌ、ベール、ノワールが順に言う。

「これ何かどうかな？」

「いや、こっちも捨てがたいが………まあ折角だし二つとも買うか」

二人は服を買いに来ている。

デートらしいと言えばデートらしい。

背後の五人の尾行を除けばのはなしではあるが。

「ねえねえ、この服似あってるかな？」

「シンクはこっちの赤が良いんじゃないか？」

「仲睦まじいでありますなあ」

「ござる」

二人も服屋に入りこつそりと観察していた。

「そっちはどうでござるか？」

『この服、似あうんちゃうか？』

『私はこっちの方が』

『……………二人とも仕事としてよ』

「あは、あははは」

ユキカゼは苦笑しながらも二人を見ていた。

そうするとトントンと肩を叩かれる。

「あの……………これ」

店の店員が何かの紙を持ってきた。

「何何？『リコッタ、ユキカゼ、このまま見続けて後でたつぷりと仕置きを喰らうかそれとも今退散して軽い仕置きを喰らうか……………どっちが良い』……………」

ユキカゼは慌ててエクレールを見る。

そしてユキカゼは見た。

楽しそうにシンクと会話しているエクレールの右手は握り拳を作りプルプルと震えている。

「リコ、退散でござる!」

「何でありますか?」

リコッタにあの紙を見せるとユキカゼと同じ行動をして全てを理解した。

「ジェノワーズ、撤退であります!」

小声でそう言うジェノワーズが震えた答える。

『は、早く逃げへんと骨まで砕かれてしまうわ!』

『早く逃げましょう!』

『……………残念ながら手遅れです』

『え、何で……………って、ちよっ!待って』

『『イヤアアアアアアアアアアア!』』』

三人の断末魔が響き彼女らの声が聞こえなくなる。

「ちょ、大丈夫でありますか!」

「返答するでござる!」

そう言う通信が入る。

『今からそっちへ向かう』

二人はトランシーバーを落とし体をガタガタと震わす。

「逃げる!」

二人は一目散に逃げ去った。

その夜もまた二人の断末魔が聞こえ、

ジェノワーズは翌日、ボロボロになった所をシンクによって無事保護された。

14ー ガウル直属親衛隊（後書き）

感想をよろしくお願いします

15 ジェノワーズ保護

「災難だったね三人とも」

シンクの部屋でジェノワーズの面々は体をガタガタ震わせている。何かしらのトラウマの種を植え付けられたみたいだ。

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イ……………」

「ウチ、良い子にするから、だから……………」

……………」

ベールはただひたすらゴメンナサイと言い続けてジョーヌは親に叱られた子供の様な事を言っている。ノワールに関しては眼が死んでいるとしか言いようが無い。

「あはは、大丈夫？」

苦笑しながら紅茶を三人に振る舞う。

「シンクは何で許してくれんの？」

「私達の事を許してくれるんですか？」

「まあ、許せない所もあるけど皆、心に深い傷を負ってるみたいだし……………」

その原因が自分の彼女だと思うとなおさら責められない。

逆に謝りたい。

「うう、良い人や。めっちゃいい人や」

「感動します」

「……………」ありがとう

ノワールも何とか回復して会話に参加してきた。

皆、猫科なので（ベージュはうさぎだが）猫舌なのでふうふうと冷ましてから紅茶を飲んでいる。

「それじでは、我らジェノワーズは」

「恩を返す為に」

「……………暫くここで世話係をしましょう」
シンクは心の底からこう思った。
何でこんな事に。

15 ジェノワーズ保護（後書き）

本文短めですいません。

感想よろしくお願いします。

16－エクレ暴走

「よし！」

彼女は今日もシンクの部屋の前に立っていた。

エクレールは今日もシンクを起こしに来たのだ。

「シンク、起きてるか？」

ノックをして部屋に入るとベットの上の丸く膨らんだ布団に視線が行った。

「シンク、朝だぞ」

布団を揺する。

「むにゃ……………」

エクレールの頭に稲妻が迸る。

（お、女の声！ま、まさかシンク……………」

「どりゃあああ！」

布団を引っぱがすとベットの上にはシンクと何故かメイド服を着たジェノワーズが居た

「……………」

エクレールはまるで凍った様に動かなくなる。

「すうすう」

幸せに寝ているシンクに対して様々な感情がエクレールの頭を動かす。

嫉妬、怒り、憎しみ、悲しみ、全てが頭の中で混ざり合い一つの結論に達した。

「シンクウウウウウ！」

そのままエクレールは涙を流しながらベットへダイブした。

「ゴホア！」

エクレールの全体重が全身を圧迫する。

「エ、エクレ……………」

不意の一撃の打ち所が悪かったシンクは痛みを堪えていた。

「ヤダ、シンクは私のだ、誰にもあげない！離れない！」

寝ているジェノワーズの三人が何事かと眼を覚ます。

「わ、わかったから、僕はエクレと離れないから、だから一旦……

………放して」

エクレールは無意識に喉を絞めている為にシンクの肺へと酸素が送る事が出来なくなっていた。

「ヤダ、はーなーれーなーいー！」

腕を放してと言いたいのだが彼女の脳内では『放す』が『離す』と変換されていた。

「ちよ、ヤバいってシンクの顔が青くなってるやん」

「あわわ、早く助けないと」

「……………ちよっと落ち着いて」

ノワールがエクレールの首にチョップを入れるとエクレールは気絶した。

「た、助かったよ」

エクレールは気絶した今でもシンクを放そうとはしなかった。

16 エクレ暴走（後書き）

またも短めですいません。
感想よろしくお願いします。

17 エクレールの幼少期時代

「あのー、すいません」

シンクはエクレールの兄であるロランの元へ行った。

ロランは書類整理や訓練の為、毎日朝早くに起きている。

「おや、勇者ど………の？」

まあ、誰でも驚くだろう。腰にガッチリと掴まっているエクレールのホルドを外そうとして失敗して背負う形となってロランの目の前に居る。

「これはまた珍しい事があるもまだ」

「あ、あはは」

シンクは苦笑をする。

何故か最近苦笑いしかしてない様な気がする。

「エクレールが子供みたいに……ねえ」

ついさっきの出来事を話すとロランは首を傾がせる。

「たぶん幼少期の頃に戻ったんだろ」

「幼少期？」

「昔からエクレールは独占欲が強すぎるんだ、騎士になってからは無くなったんだが多分再発だと思う」

「つまり抑制された感情の爆発って事ですか？」

「まあ、そうなる」

これからはエクレールの対応を考えないといけない。また首を絞められたらたまらない。

「それより妹の事を大切に思ってくれてありがとう」

「あ、いえそれは………」

彼氏ですからと言いかけた口を無理やり塞ぐ。

二人がつき合っている事はまだ内緒にしていくそうだ。

「知ってるよ、勇者殿とエクレールが恋人同士なのは」

「あ、やっぱり……………」

大体はバレてる事は知っていた。

エクレールは大声を出すので周りに簡単に気付かれる。それにユキカゼとリコッタがばらさないととは限らない。

「姫様から聞いた」

「姫様から！」

情報をリークした人物に驚きを隠せない。

そう言えば最近メイドさん達を見かけるのはそう言う事なのだろうか。

「まあ、これからも妹と仲良くしてやってくれ」

「はい！」

シンクはハッキリと威勢の良い返事を返した。

17 エクレールの幼少期時代（後書き）

感想よろしくお願いします。

18 獅子の逆襲

「遅い！」

ガレット獅子団領国でレオンミシェリ閣下は大声を出していた。

「あ奴等はいったい何処で油を売っているのじやろうか」

先日の戦の借り、つまり脱がされた件について深く根に持っている閣下はエクレールの秘密を探る為にビスコッティに駆り出された。だが向こうでのジェノワーズの状況が耳に入っていない閣下はただ待つだけだった。

「三日は経てば帰って来るとっておったが……………」

あれから一週間経ったがメイドとしてシンクに就いているジェノワーズは閣下の命など忘れ奉仕活動に力を注いでいるのが現状である。

「ガウル、ガウルはおらぬか！」

「如何した姉上？」

「ジェノワーズのバカ共を叩いてくる、後の事は頼んだぞ」

閣下は大斧を担いで飛び出して行った。

「待っておれ、垂れ耳」

黒いセルクルに乗った閣下は復讐を心にビスコッティへと行った。

18 獅子の逆襲（後書き）

短めですいません。

感想よろしくお願いします。

19 閣下襲来

「ミルヒ、ミルヒは居るか！」

「レオンミシエリ様、如何したのですか？」

半日かけてセルクルを走らせて閣下はやってきた。

「ちよっとジェノワーズの三人組を探しに来てな」

「その前にお風呂に入ってきたら如何ですか？」

「まあ、そうだな先に風呂を使わせてもらう」

連続でセルクルを走らせて体は汗でびしょびしょであった。

「エクレ、機嫌直して」

「折角のデートだったのに……………」

デートの最中までもリコッタとユキカゼが乱入してきた。

楽しいデートが台無しになったエクレールは頬を膨らましていた。

「あれ、このセルクルって……………」

「如何した？」

目の前の黒いセルクルを見て眼を丸くした。

「グワァァッ」

大きく口を開けて鳴き声を響かせる。

「閣下のだよね」

「何だか嫌な気がする」

「お主ら帰るぞ！」

ズルズルと閣下はジェノワーズの三人を引きずる。

「閣下」

「勇者と垂れ耳、ジェノワーズの三人が世話になったのお」

「いえ、別に」

「あと、垂れ耳」

「何でしょうか？」

閣下はエクレールに近づく。

「いつまで持つかのう？」

小声で呟くと閣下はエクレールと距離を置く。

「えっ!？」

閣下は何かを企んでいる様な笑みを見せた。

19 閣下襲来（後書き）

閣下、始動！

感想をお願いします。

20 閣下の企み

「如何してこうなったんだろう？」

シンクは自分のセルクルに乗って閣下と共にガレット獅子団領に向かっていた。

「勇者、早く来んか」

事は前日のミルヒオーレと閣下の入浴にあった。

「最近ではガレット獅子団の士気が落ちてきたんじゃが、何か良い手はないかのお」

「それは困りましたねえ」

ミルヒオーレが閣下の髪を洗っていた。

どちらかと言うと閣下の方が年上なのだが子供っぽい一面を持ち合せているからかもしれない。

「敗戦続きじゃし、如何したものかのう。せめてワシの良い訓練相手はおらんのか」

わざとらしく言うミルヒオーレが何かを思いつく。

「それでしたらシンクをお貸ししましょうか？」

「それは良い案じゃのう」

最初から狙っておったと思えるぐらいわざとだった。

「如何した勇者、ガレットならもう目の前じゃ」

そう言う目の前に大きな青い物が見えた。

「わああ！」

海である。潮風がここまでやってくる。

「これから半月ここがお主の家となる」

「よろしく願います」

「ああ、よろしく頼むぞ」

シンクはただ無邪気に笑う。

ただし今回の件に不満を持ってる者を知らずに。

20 閣下の企み（後書き）

今回はエクレールの暴走が入ります。

苦手な方も好物の方も温かい目をお願いします。

感想お願いします。

21 エクレールの我慢 壱

「シンク、起こしに来た……………ぞ」

今日もカップル恒例のイベントである『彼女に起こしてもらおう』が実行されたが肝心のシンクはいない。

「つい、来てしまった」

そう言ってシンクの部屋へ入り椅子に座る。

「今頃如何してるのかな？」

机の上に伏せてつまらなそうな顔をする。

何時も明るいエクレールから活気が抜けて今はまるで空気の入っていない風船の様だ。

尻尾にも元気は無い。尻尾は重力に逆らわずに下を向いていた。

「半月、か」

二十日間は向こうで訓練するようだ。

「私も自分の仕事をしなければな」

エクレールは部屋を出ていつもの様に訓練場へと向かって行った。

「てい、やあああ！」

エクレールは騎士団の少年と戦っていた。

「……………」

エクレールはただ無言で顔だけは空を向いていた。

「はあああ！」

少年は一撃に全力を注ぐ。

「……………」

渾身の一撃はひらりと避けられ、腹にフックを入れる。

「ごはっ」

少年はその場で倒れ込んだ。

「そこまで！」

ロランが止めに入る。

「如何したエクレール、いつもより技に切れがないぞ……………」
「言うかまるで心が欠けてる様だが」

「……………」

瞳からはハイライトが消えている。

今のエクレールは魂そのものが抜けて抜け殻状態である。

「おい、エクレール。如何した？」

「えっ？あ、すみません」

「柄にもなく頭を下げるな、疲れているなら休んでいいぞ」

「あ、はい」

そう言っ歩き出したエクレールの瞳からまたもハイライトが消えた。

21 エクレールの我慢 壱（後書き）

何？エクレールがおかしい？
気のせいです。

感想お願いします。

22 ガレットでの日々

「ふんぬううう！」

「まだまだあああ！」

筋肉質の体型の男性とジョーヌが腕相撲をしていた。

「これでえ如何だああ！」

男性がゴリ押ししてジョーヌを負かした。

「また負けたあ」

ジョーヌは机に突っ伏す。

「まだまだ甘いなあ、負けたのだから腕立て二百回いい！」

「は、はいいい」

ゴドウィンと言うこの人は男性キャラの説明は面倒なので公式サイトを見てね。

「私の紹介をサボるなああああああああああ！」

「楽しそうだね」

「まあ、何時もこんなに五月蠅いと迷惑じゃがな」

「それで閣下、僕はここで何をすれば良いんでしょうか？」

「まあ、慌てるな、風呂にでも入って来い」

「あ、はい」

風呂桶を持って風呂場へとシンクは行った。

「和式だあ」

風呂場は日本風であった。

「まずは、五右エ門風呂っ」と

湯ぶねに浸かりシンクは体を癒す。

「中々の湯加減だなあ」

風呂に入り天井を見上げる。

「エクレは如何してるかな」

等と思いつつもシンクはガレットでの日々に満足していた。
彼女の事を知らずに。

22ーガレットでの日々(後書き)

気づけ、気づけ勇者ややややややややややや！

感想お願いします。

23 エクレールの我慢 式

「シンク、シンク、シンク、シンク」

シンクの部屋でベットの上で布団に身を包みゴロゴロと回っているのはエクレールだった。

シンクが居なくなりもう三日、いや、まだ三日と言うのにエクレールの我慢はすでに頂点を迎えていた。

「お、落ち着け、こう言う時は素数を数えろとシンクに言われたんだ」

深呼吸をして素数を数え始める。

「1、2、3、4、5、6、7、8、9、10」

素数ではなく普通に数を数えている。

「あれ、素数って何だっけ？」

ついには思考回路まで焼きついてきた。

「待て待て、数え直そう。シンク、シンク、シンク、シンク、シンク、シンク………」

すでに数字ではない。

「あああああああああ、もう何何だこの感情は！」

怒りや嫉妬心に切なさ、様々な感情がエクレールの中で渦巻く。色で表すとどす黒い紫だ。

「シンク、シンク、シンク！」

頭を抱えて叫ぶ。

彼女は多分もう持たない、そう思ったのはドアの前で盗み聞きしていたリコッタとユキカゼであった。

23 エクレールの我慢 弐（後書き）

ヤバい壊れてきた。

感想お願いします。

24 火山噴火

「……………」

エクレールは一言も喋らずに剣を振っていた。

「エクレール、如何した、声が出ていないぞ」

ロランの声に耳を傾けずただ無心に剣を振る姿はまるで包丁を研ぐ山姥やまんばが如く。

「あはは、エクレール、勇者様が居ない事がショックの様だな」

勇者がガレット獅子団領に行ってもう十日が立った。

流石に我慢の限界だろう。

「……………」

さっきよりも素振りの音が大きく、鋭くなったのはロランの気の所為だと思う。

「おお、エクレが」

「たいへんでありますなあ」

エクレールの素振りを温かい眼で見ているリコッタとユキカゼ。

「ふん！」

二人の方に剣が飛ぶ。

「「ぎゃあああああああ！」」

剣は二人の顔の間に刺さった。

「ドウシタ、二人トモ」

エクレールはゆらりゆらりと体を左右に揺らしながら近づいてくる。

「いや、その、エクレは何してるのかなあと思ったので」

「よ、様子を見に来たでござる！」

エクレールは足を一歩ずつ前へとだしこっちへ近づいてくる。

ただそれを見て待つだけの二人の心は一つとなり未来が見えてき

た。

（（ああ、殺される））

そんな二人の頭の中に解決案が浮かび上がる。

「そ、そう言えばシンク殿、今頃楽しいでありますかな？」

ピクリと体を震わせ歩行を中止する。

「多分、楽しいでありますよな、もう帰りたくなるかもしれないでござる」

エクレールは二人に速足で近づき肩を掴む。

「二人トモ、アイツヲ迎エニ行クゾ！」

二人は怯えながらエクレールの背後に狼の姿を見た。

三人はセルクルに乗りガレットへ突撃の準備を始めた。

24 火山噴火（後書き）

風船には一定の量しか入らない。
入れ過ぎれば割れるのはわかる。

だが割れそうで割れない風船ほど不安定で危険な物はない。
by 主

感想よろしくお願いします。

25 獅子と飢狼

「閣下、彼女達が来ます、お早めにお準備を」

閣下の部屋に男性が入りそう忠告する。

「以外に耐えたな、だが十一日程度ではまだまだかのお？」

外での戦闘を窓から眺める閣下は武器を持つ。

外にはたった一人で自軍を吹き飛ばしていくまるで台風のような少女が暴れていた。

「はっはっは。愉快愉快、まるで兵がゴミの様じゃ」

「閣下、我が軍の精鋭たちに対してそのお言葉はちよっと」

「うむ、そうか？小娘一人を倒せぬ兵など蟻以下じゃろう」

男性は首を捻り考え込む。

「それより、客の相手をしなければのお、客は丁重にもてなせ」

「かしこまりました、閣下」

男性は静かに部屋を去った。

「まずは小手調べじゃ」

「我が名はゴドウィン、このガレット獅子団の……………」

「挨拶はいい、かかってこい」

エクレールは何時もの表情でゴドウィンに話しかける。

「ぶるあああああ！！」

鉄球をエクレールに投げつける。

エクレールは避けようとせずに武器を構える。

「ふはははははは！その様な武器で何をする」

武器は何時もの短剣ではない。

日本で言うバットだ。

「ふん！」

鉄球を打ち返す。

鉄球はそのままゴドウィンの顔面を直撃した。

「バ、バカな今夜の夕食にステーキを取り入れたこの私が、ビスコッティの小娘ごと……き……に」

バタンとその場で倒れたゴドウィンの上を踏んでエクレールは先を急いだ。

「まったく、ゴドウィンも駄目じゃったか」

「ガウル様は数秒でやられました」

ため息について閣下は立ち上がる。

「それでは私が垂れ耳を迎えに行かなければならんなあ」

閣下は大斧を片手にドアを開けた。

25 獅子と飢狼（後書き）

感想よろしく願います。

活動報告に大切な事が書いているので読んでください。

26 一獅子と飢狼交わる

「グルオオオオオオオオオオオオ！」

「ガルウウウウウウウウウウ！」

エクレールと閣下は激しい戦闘を繰り広げていた。

だが掛け声は人の物ではない。

二人からは野生の獅子と狼を思わせる気迫があった。

「グオオオオオオオオオオオオオオ！」

エクレールは連続で紋章砲を撃つ。

「ガルウウ！」

閣下は大斧を振り回して攻撃を弾いていく。

「あはは、野生に帰ってるね」

「ああ、全くだな」

シンクとガウルはその戦いを遠くから覗いていた。

戦っている二人の周りにはジェノワーズの三人組やリコッタ、ユ

キカゼが倒れている。

二人の激しい戦いの巻添えになったのだ。

「閣下あああああ、ブルアアア！」

そこにゴドウィンも飛びこむが一撃で吹き飛ばされた。

「ゴ、ゴドウィイイイイイイイン！」

ガウルはゴドウィンの飛ばされた方向を向いて叫んだ。

「どうしよう、もうわけがわからなくなってきた」

閣下とエクレールの戦いが始まりもう一時間が経過したが今だ決着はつかない。

「はあはあ残念じゃが、諦めろ、既に顔が真っ赤じゃぞ」

「レオンミシエリ姫こそ、息が、上がってますよ」

お互いに限界が近く今にも倒れそうだった。

「ガウル、止めようか」

「おう」

そう言ってシンクとガウルは二人を止めに入る。

「来るな！」

ガウルは閣下の大斧で吹き飛ばされた。

「まだ、決着はついてないぞ」

「そうだ、無粋な真似はかえって人を傷つけるぞ。勇者、ガウル」
ガウルは鼻を押さえて立ち上がった。

「それでは決着をつけようか」

「はい、レオンミシエリ閣下」

二人は武器を構えて相手の隙を窺う。

「ていやああああ！」

「せええええい！」

お互いの武器同士がぶつかる。

互いの攻撃が決まり沈黙が辺りに漂う。

「垂れ耳ごときにやられるとはわしも……まだ……弱いもう」
そのまま閣下はその場に倒れる。

「残念ですが私の私物^{シンク}は返してもらいます」
エクレールはその場で宣言すると体をふらつかせて倒れた。

26 一獅子と飢狼交わる（後書き）

DOG DAYS 本篇が終わってもう数カ月。

この物語にも終わりの時期がやってきました。

最後まで楽しんでいただけたら光栄です。

次回、最終回です。

最終回―垂れ耳彼女の金髪勇者（前書き）

すいません投稿遅れました。
最終回です。

最終回―垂れ耳彼女の金髪勇者

「あ……………れ？」

眼を開けると見知らぬ天井があった。

「あ、エクレ」

視界にシンクの顔が入る。

「ここは、何処だ？」

エクレールはそつと体を起こす。

「大丈夫？丸二日も寝込んでたけど」

「ああ、大丈夫だ、シンク、私に構わず自分の心配をしろ」

シンクの眼の下に溜まっている隈に指を指す。

「私の事を心配してくれるのはありがたいが、お前が倒れたら私が心配する」

苦笑してシンクは場を治めようとする。

エクレールはシンクに抱きついた。

「エクレ？」

シンクは顔を赤らめながらもエクレールを抱きしめる。

「今はこれで良い。だが帰ったらもつと甘えてやる。人前でも甘えてシンクを辱めてやる」

「そんなに僕の事が恋しかった？」

「ああ、恋しいな。人肌恋しい、だから今度一緒に寝よう」

「あはは、それはちょっと飛び越えすぎの様な気が」

そんな桃色溢れる空間をドアの隙間から誰かが覗いていた。

「そのまま、顔を近づけるであります。キスであります」

「キスしちゃうでござるよ！」

「な、なあ止めようや、シンク達の事を邪魔したらアカンって」

「同感でーす」

「……………同感」

リコッタにユキカゼ、ジェノワーズの三人が部屋の状況を覗いていた。

「お、お前等、何やってんだ？」

「何やら楽しそうじゃな」

「ちっ、空気の読めないのが来たであります」

「撃退でござる」

ユキカゼはまるで通り抜ける風が如く素早い動きでガウルと閣下の背後に回り首に一撃入れた。

倒れるガウルとなり何もなかったかのように平然な顔をした閣下が立っていた。

「残念じゃが、わしはその程度では沈まぬぞ」

閣下の名前は伊達ではなかったようだ。

「わしは勇者と垂れ耳に用事があるんじゃ、退いてくれ」

片手でユキカゼとリコッタを退かした閣下はドアを開けた。

「へっ？」

閣下は素っ頓狂な声を上げたのは理由があった。

目の前にベットの所で押し倒された男性と押し倒した女性が居ただけだ。

「すまん、この部屋は防音対策はしておらぬから出来るだけ声を殺して頂けたら幸いじゃが……………」

「閣下！こ、これは違うんです。エクレがいきなり僕を押し倒して」

「出来ればそのまま退出して貰えばありがたい」

「わ、わかった」

そのまま体を百八十度回転させて出て行った。

「まだ、わしには十年は早かったか」

「さあ二週間も私を放っていたんだ、それ相応の覚悟は出来てるんだろうな」

「あの、エクレ、眼が可笑しいんだけど。獲物を追い詰めた狼みたいなんだけど」

尻尾をパタパタと振るエクレールは息を荒らげてシンクに顔を近づける。

「少し発狂するかもしれないが我慢しろシンク」

「た、助けてユッキー、リコッタああああああ！」

勇者の悲鳴は小一時間ほどガレット獅子団に響いたそうだ。

「まったく、悲鳴を上げるなんて」

「あはは、ごめんごめん」

「もっと虐めたくなるじゃないか」

シンクは茫然とした顔でエクレールを見る。

「それより、何故私があそこまで怒っていたか解るな」

シンクは彼女の顔を見て頷く。

「ごめん、エクレの気持ちも解らずに勝手な事して」

「解れば良い。だが」

エクレールは右手でシンクの眼を隠す。

そして口で口を塞いだ。

「んむっ！」

「これで許してやる」

そう言った彼女は手持ちの武器を向けた。

死闘の末に少し欠けたり、ヒビが入ったボロボロの短剣を。

シンクとの初めてしたデートの記念品を。

「悪いがまたデートに付き合ってくれるか？」

エクレールは尻尾を左右に振り剣を納めた。

「次は丸一日付き合っ[て](#)あげるよ」

シンクは笑いながら彼女の手を握った。

「一日じゃ足りないな」

シンクに握られた手を解き、^{ほど}腕を組んだ。

「ずっとお前にイチャついてやる」
そう笑う彼女にシンクも笑顔を返す。
「シンク、お前は私の物だ。それだけを忘れるな」
彼女の声には恥ずかしさと嬉しさが感じられた。
ビスコッティ共和国では今日も親衛隊長と親衛隊副隊長の仲睦まじい二人の噂で持ち切りだ。

木陰に金髪の男性が座っていた。

「おとーさん」

小柄な少女が自分が父と言う男性に駆け寄る。

少女は金髪に垂れ耳と尻尾があり短剣を所持している。

「どうしたの、カナデ？」

カナデと言う少女を男性は抱きとめる。

「ミズネおねえちゃんがご飯だって。おかあーさんは？」

「ぐっすり寝てるよ」

男性の指を指した方向には男性の膝を枕に緑の髪の女性が寝ている。

「おかーさん、起きて」

カナデは女性の体を揺するが起きる気配が全くない。

「おとーさん、盗っちゃうよ？」

「娘でもそれは出来ない」

さっきまで寝ていた女性はバツと体を起こす。

「それじゃあ私が貰う！」

木の上から緑髪の少女が飛び降りてくる。

「おっと」

少女は男性の背後から抱きつき顔を背中に擦る。

「ミズネ、危ないだろ」

この少女はカナデの姉であるミズネ。

母と妹と同じく垂れ耳だが尻尾を元気に振っていた。

「まったく、この二人は誰に似たんだか？」

母親らしき人物が呆れた顔をする。

娘たちも呆れた顔をして母親に指を指す。

「だってさ。どうするエクレ？」

「二人がいるときは母さんだろ、シンク」

「二人がいるときは父さんでしょ？」

「ああ、そうだったな」

シンクは空を見上げて顔を緩める。

「あれから十三年か」

「帰りたいか？元の世界へ」

「いや、今はここが僕がいる世界だから」

四人が立ちあがりその場で背伸びをする。

「家まで競争だ、行くぞミズネ、カナデ！」

女性 は男性を突き飛ばし走って行った。

「ちょ！待ってよエクレ」

「あはは、捕まえてみる」

今日も二人の笑い声がもう二つの笑い声と共に響く。

十三年間、変わらずビスコッティに響いた、親衛隊隊長と副隊長の
声である。

完

最終回―垂れ耳彼女の金髪勇者（後書き）

感想よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0500u/>

垂れ耳彼女と金髪勇者

2011年7月25日15時51分発行